

# ボルネオ島サラワク州における削りかけ状木製具について －日本列島の削りかけ習俗との比較から－

今 石 みぎわ

## はじめに

日本列島本州以南では「削りかけ」と総称される木製具を用いる習俗が広い地域にみられ、特に小正月周辺の行事や儀礼の中で濃厚に伝承されてきた（図1・2）。一方、北海道以北においても、アイヌ民族におけるイナウとして、削りかけに酷似した儀礼用の木製具が用いられており、さらには、北はニブフやウィルタなど北方の諸民族、南はラオスやボルネオ島、ベトナムなど、東アジアの広い地域において類似の木製具をめぐる習俗が伝承されていることが知られている。

日本列島に色濃く分布し、御幣の原型とも言われる削りかけは、日本の精神文化を考える上でも最も重要な祭具のひとつと言えるが、それがアイヌのイナウをはじめ、東アジアの広い地域で見られる類似の木製具とどのような連続性を持つのか、あるいは影響関係にあるのかについては、これまで比較研究的視点からほとんど議論されてこなかった。またそもそも、東アジアの削りかけ状の木製具に関するまとまった調査報告もないのが現状であった。

そこで本稿では、今後の比較研究の展開と、それによる日本文化に対する視座の深化を目指し、2012年6月28日～7月4日にかけて行なったマレーシアボルネオ島サラワク州での削りかけ調査についてまとめ、報告しておきたい。筆者はこれまでも10年にわたって日本国内で削りかけ習俗に関する

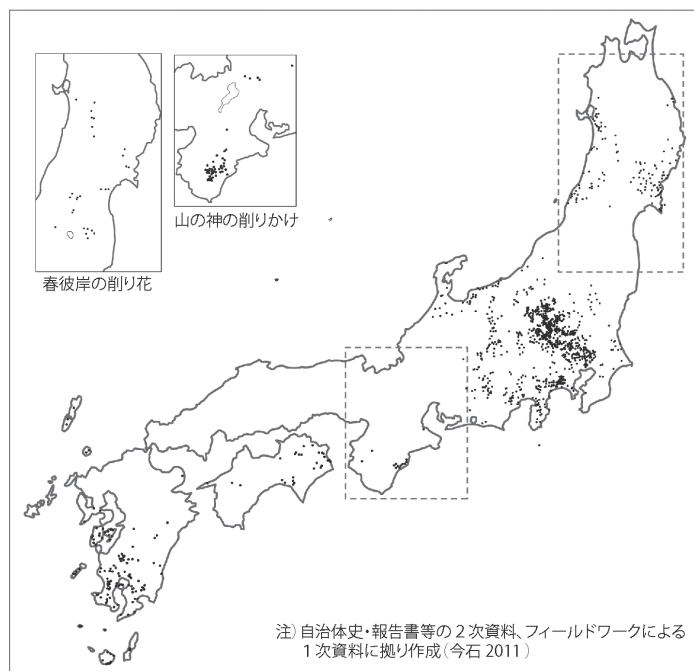


図1 本州以南の削りかけ習俗の分布（小正月ほか）



図2 小正月の削りかけ（北関東）

調査を行ってきたが、同テーマでの海外調査は初めてである。したがって方法論の模索・検証も含めて課題は多く、調査には当然不十分な点が残るが、断片的な情報も含めて一次資料を提示すると共に、若干の考察を加えてみたい。

## ボルネオ島の削りかけ状木製具 調査報告

### 1. 調査の概要

本調査は北海道大学アイヌ・先住民研究センターでアイヌ文化を専門に研究する北原次郎太・山崎幸治両氏と共に3名で行なったもので、今後ボルネオ島を含む東アジアでの本格的な調査を見据えたプレ調査と位置づけられる。したがって本稿は今石が報告するものであるが、すべての調査は3名が共同で行なったことをはじめに強調しておきたい。また今回の調査は、旅行全体のコーディネートを依頼した(株)ジスコ・ボルネオ旅行社に多大なる尽力をいただき、はじめて可能となったものである。深い感謝と共に併せて記しておきたい。

#### (1) ボルネオ島サラワク州の概要と旅程

ボルネオ島は日本の約2倍の面積を持つ、世界で3番目に大きな島である(図3)。赤道直下に位置し、高温多湿な熱帯多雨林は多種多様な動植物による豊かな生態系と、数十にのぼる少数民族の多様な文化を育んできた。今回、調査を行なったマレーシア領サラワク州はこのボルネオ島の北西部にあたり、最大の人口を占めるイバンをはじめ、ピダユ、クニャー、カヤンなどの先住の民族集団が大

図3 ボルネオ島と旅程図 ※図中の番号は調査番号に符号している



きな人口比を占めている。このうち、沿岸部に住むマレーやメラナウに対し、内陸部に住む諸民族は「ダヤク」と総称され、焼畑農耕による陸稲栽培を行なうこと、河川の本流や支流沿いに作られたロングハウスに居住し、川を重要な交通手段として利用するなどの文化を共有してきたという<sup>1)</sup>。またこの中でも特に上流部に住むとされる20以上の民族集団をオラン・ウル(上流の人々)(upriver people)と総称するのが習わしらしい<sup>2)</sup>。今回の調査では内陸部のムル地域からロングボートやジープで下流に向かい、いわゆるオラン・ウルと呼ばれるブラワン、プナン、カヤンな

どを含むいくつかの民族の村を訪ねることができたので、ここに報告したい。なお、これらの地域にはキリスト教が広く浸透しており、今回お話を聞くことのできた方々の宗教はいずれもキリスト教であった。

## (2) 調査方法

調査は聞き取りを基本とし、可能な場合は実際に削りかけを作ってもらったり実見させていただいた。筆者らの使用言語は英語で、現地語との通訳を介して、もしくは可能な場合は直接英語でやり取りをした。英語表記はすべて現地のガイドが書いてくれた綴りで、カタカナ表記は耳で聞こえた音を、そのアクセントと共に筆者が記録したものである。なお聞き取り調査の様子は、検証のため、許可を得てほぼすべてを山崎幸治氏がビデオ撮影している。

## 2. 調査報告

以下に一次資料として、削りかけ状木製具の習俗に関わる調査内容を列記する。お話を聞かせてくれた方については「村名／民族名／お名前（年齢）」の順に記してある。

### ①ムル村／ブラワン／Belawang Tugangさん（推定64歳<sup>3)</sup>）

**削りかけの名称** *separaok*（シェパラオッ）。名称の由来は不明で、形や大小に関わらず全てシェパラオッと呼ぶ。

**用途** “VIP<sup>4)</sup>”を歓迎する装飾として飾る（図4・5）。ロングハウスのメイン玄関をはじめ、戸口、柱、軒下など、VIPが通る場所全て、また船着き場から家まで上がってくる道沿いの手すり等に飾りつける。VIPが重要な人物であればあるほど大きなシェパラオッを作る（2、3片削ったものを木材から切り離し、それを重ねて束ね、大きくするという）。シェパラオッはVIPが帰ったら捨てるか燃やして処分する。

**形状** 形は個人の自由で特に意味や決まりはなく、2～3段に削るもの、1段の長い削りをつけるものなどがある。ただし削りは必ずウエストよりも高い位置に付ける<sup>5)</sup>。基本的に着色しない。

**材料** 材料として使う木は *kajuh taluyang*（タルヤンの木）という木に決まっている（図6）。この木は枝が上方にあり真っ直ぐ伸びる部分が長いので、削りやすい。木肌は白い。あまり成長しない木で、成木でも直径はせいぜい腕の太さくらいにしかない。シェパラオッに用いるのは直径3～5センチ（3～4年生位）の木で、真っ直ぐなものを選ぶ。トゲがあるため、シェパラオッ以外の用途に用いることはない。森の中でなく川の近くに生育するので入手しやすい。

**製作方法・道具** 採取してきた木の皮を取り除き、2～3日乾燥させる（ただし、緊急の場合だと未乾燥で削ることもある）。木の両端を柱などに固定し、小刀を身体で押しながら削る（図7）。小刀は *beak*（ベーク）と呼ぶ片刃の刃物（図8）。ベークはラタン細工や木彫などの細かい作業や、狩った動物を捌く際に普段から用いている刃物で、山歩きをする際には *pukuk*（プクック・山刀）と常に一緒に持ち歩く。小刀は自分で作る。

**製作者、禁忌など** 削ることをブラワンの言葉で *miene*（マイーン）と言うが、普段からマイーン仕事をするのが男のため、シェパラオッも男性が削る。ただ、技術があれば誰でも削ってよいし、女





図4・5 シェパラオツ。長いもので全長2尺弱。長い削り片を持つものは、削りが垂れ下がるように必ず斜めに立てる。横に渡した竹のポールにも削りかけが施してある



図6 タロヤンの木。村からボートで7～8分の川辺に群生していた



図7 シェパラオツを削る。1本作るのに50分はかかるという

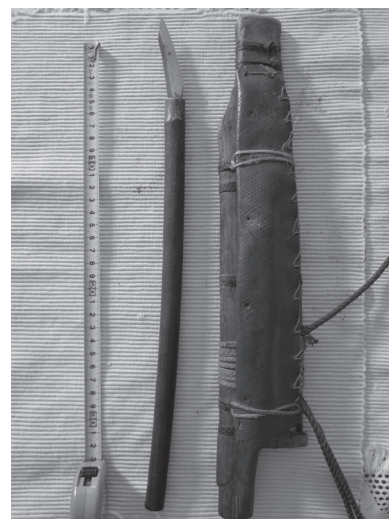


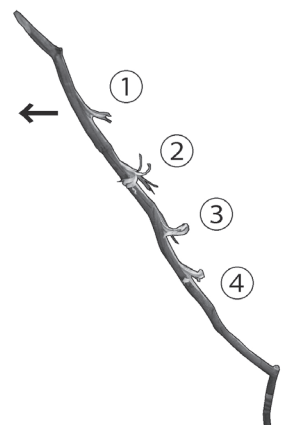
図8 ベーツ（左）と山刀はセットで持ち歩く。刃渡り6センチほど



図9 ナハツ。刃渡り10センチほど



図10 オーローを削る



削りの数で人数を表わし、立てかけた向きで向かった方向を表わす。この場合4人の人が矢印の方角に向かったという合図になる





図11 削り以外に様々なサインがある。(左) 根本に木の枝を引っ掛けると「この近くにいる」(中) 葉を突き刺して真っ直ぐ立てると「家に帰った」(右) 削りの下に引き傷をつけると「村で緊急事態があったから帰れ」のサイン



図12・13 船着場から耕地に向かって一列に立ててある。高さ約165センチ

図14 小刀で押し削る



図15～17 川辺のバングフット。これを辿ると刈り払いの済んだ焼畑耕地（右下）へと導かれる

性や子どもがシェパラオッに触れるのも問題ない。製作の際のタブーも特になく、いつでも作ってよい。ただし、削りの部分が脆くなるため逆木にしない（逆木にしないのはどの木製品でも同じ）。

**伝承の経緯** 伝統であるシェパラオッを学んでおかなければならないということで、20代前半に祖父から習った。当時は年配の人はみんな削った。この飾りは現在では赤や黄色の布や旗などで代用されるが、今でもシェパラオッを作ることができる人は村に何人かいる。

**その他** 森で火おこしをする際、削り片を焚き付けとして用いる。名称不明。材料は手頃な木なら何でもよい。

## ②ムル プナン居住区／プナン／ Lusing Jelumanさん（67歳）、Katong Tuahさん（推定62歳）

### (1) 装飾

**名称** シュプルート

**用途・形状** VIPを歓迎する際やクリスマスを祝う装飾として用いる。使用後はそのまま捨てる。ブラワンのシェパラオッの写真を見せたら、形状は全く同じとのこと。

**材料** 材料は *kajuh puyau*（プニャウの木）という山奥に生える木。樹皮は黄色っぽく、木肌は白い。この木は真っ直ぐ伸びるため使いやすい。実を噛むことはあるが木質部を使うことはない。里の近くには生えてない。

**製作方法・道具** *nahart*（ナハッ）と呼ばれる常用・片刃の刃物で押して削る（図9）。

**製作者と伝承状況** 全ての男は作ることができるが、近年は作っていない。

### (2) 標識（シルシ）

**名称** *Urow*（オーロー）

**用途** 森の中で人の移動を伝えたりメッセージを残すためのサインで、道の真ん中や道端など人目につきやすい場所に立てる（図10・11）。古いサインはそのまま放置しておく（サインが古いかどうかは木の乾燥具合で用意に判別できるためという）。村内の全員が同じサインを使う（つまり、個人を特定するようなシルシについては聞くことができなかった）。

**材料** 森の中で手頃な木を伐ってその場で作る。製作方法等は上記と同じ。

## ③ロングパナヤ村／カヤン／ Jonathan Uloiさん（57歳）・Puyang Ajangさん（推定50歳）夫婦

**名称** *pengfut*（パングフット）。削りの長短に関わらず名前は同じ。

**用途** 焼畑の刈り払い作業<sup>6)</sup>の合間に、楽しみのため（for fun）に作り、船着き場の辺りに立てておく。特に片付けたりせず、そのまま放置する。またVIPを歓迎する際やクリスマスにも装飾として飾る。

**形状** 個人の自由で、段をつけて短い削りにしたり、1段の長い削りにしたりする（図12・13）。技術がある人は長いものを作るので、概して技術のある高齢の人のパングフットは削りが長い。着色はしない。

**材料** 材料は *gulak*（グウラッ）という木で、耕地の傍など人里に生える。樹皮が特徴的に白い。軽くて丈夫なので小屋を建てる際の建材などにも用いる。木肌も白い。



**製作方法・道具** 木の先端を固定し、*yuh* (ユー) と呼ぶ常用の刃物を押して削る (図14)。

**伝承の経緯** 30歳頃、結婚を機に独立するにあたり、伝統を引き継ごうと思い、父から習った。この辺りではみんな作ることができる。

**その他** 森で火おこしをする際、削り片を焚き付けとして用いる。名称不明<sup>7)</sup>。

#### ④ロングパナヤ村／カヤン／Jau Auyiさん (推定80歳)

**名称** *pengfut* (パングフット)

**用途** 焼畑の刈り払い作業をした後の休憩時に、刈り払った木を用いて楽しみのために作り、川から見える位置に立てる (図15～17)。特に片付けたりせず、そのまま放置しておく。

**形状** 個人の自由。着色はしない。

**材料** 焼畑の耕地に生える木で、*gulak* (グウラッ)、*kunyah* (クニーッ) を使う。labber tree (ゴムの木) やCoco tree (ココの木) の若木でもよい。

**製作方法** 刃物を押して削る。

**伝承の経緯** 小さい頃から年配者が作るのを見ていたので特に習わなくても作ることができた。30歳ころから作るようになった。

#### ⑤Sungai Asap Belaga村／カヤン／Heroh Uloiさん (75歳)

※この方にはミリ空港で出会い、クチンの親戚の家に遊びに行くとのことだったので、翌日、クチンの親戚宅を訪ねてお話を聞かせていただいた。ただし筆者は体調不良のためクチンでの調査に同行できず、北原氏と山崎氏の調査を後日ビデオで確認したのみである。しかし重要な内容を多数含んでいるため、下記にかいつまんで記しておきたい。

**名称** *pengfut* (パングフット)

**用途** これにはたくさんの機能がある。棒から切り離した削り片 (15センチ程度の長さ) は伝統的な新年の儀礼の中で、生贄 (雌豚が多い) の血を人々に向かって撒くために用いる (削り片を血に浸して振る)。手に持って踊ることもある。

また首狩りに行って敵の首を狩って戻った後の儀式として、図16のような棒状のパングフットを地面に立て、ここに鶏の羽根を飾ったり、鶏を生贄として供えたりする。これを *pengfut nyeng* (パングフット・ニィン) と呼ぶ。

長く削ったパングフットは、結婚式において、新郎新婦を祝福するための装飾として家の中に飾る。長ければ長いほどよい。VIP が来る際にも歓迎のために飾る。パングフットは祝福のためのものなので、葬式などに使うことはない。

**材料** *kayok payang* (パヤンの木)。これがなければゴムの木も使う。

**製作者・禁忌など** 女性が触ることに問題はないが、削るのは男性。女は普段から削り細工をしないので削る技術がないため。パングフットは使い終わったら捨てるが、次の儀式で使うためにflower (=削り片) の部分だけを棄てないでとっておく場合もある。ただしこの「花」の部分<sup>花</sup>は焼いてはいけないとされる (棒の部分は焼いても問題ない)。それは古い信仰で、焼くと悪いことが起こるとさ

れるからである。

**伝承状況** キリスト教が普及するようになってからは使わなくなった。

## ⑥バラン地区・キプット村／キプット／Urgang Belulokさん（88歳）

※バラム川沿いの地域には4つのキプットの村があり、3,000人弱が暮らすという。

### (1) 装飾

**名称** *Kabarot*（カバロォッ）

**用途** 結婚式やVIPの歓迎など、あらゆる儀式における装飾として用いる。クリスマスなどに飾ることもある（図18）。

**材料** *Tatai-ann*（タッタイ・アン）と呼ぶspecial tree（特別な木）を使う。この木は柔らかく、節がないため使いやすい。二次林に生え、成木でもせいぜい20～30フィート（6～9m）。カバロォッ以外に利用することはない。木肌は白い。

**製作方法・道具** 木の両端を固定し、*uped*（ウペッ）と呼ぶ刃物を押して削る（図18）。木は乾燥させないで使う。

**伝承の経緯・現状** 現在は70歳以上の人しか作らない。森の中の火起こしの際にも同様のものを削るため、森の中などで年配の人に習う。キプットはカリマンタンから移住した歴史伝承を持つが、移住の時点でカバロォッを作る習俗はあっただろうとのこと。少なくとも、自分が生まれた時からあったという。

### (2) 首狩りの削りかけ

**名称** 不明

**用途** 首狩りを行っていた頃、狩った首（Head Trophy）を、長く削った削り片で包んで村に持ち帰った。

### (3) 標識（シルシ）

**名称** *Patichaow*（パティチャォウ）

**用途** 森の中で人の移動を伝えるシルシとする（図19）。人数分の削りをつけ、向かった方向に傾けて見えやすい場所の地面に突き立てる。

**その他** 森で火おこしをする際、削り片を焚き付けとして用いる。名称不明。材料は手頃な木なら何でもよい。

## ⑦ドック アナック キアイ村／イバン／Dok Anak Kiaiさん（73歳）※村長

### (1) 装飾

**名称** *bungai jaraw*（ブンガイ・ジャラウ）

**用途** VIPを歓迎するためや、クリスマスの装飾などとして飾る。

**材料** *kayoh purang*（プランの木）、*angkarubong*（アンクルボォン）、*matang*（マタン）、*kapayang babi*（カパヤン・バビィ）などを使う。いずれの木も木肌が滑らかで柔らかく、二次林に



生える。

**製作方法・道具・禁忌** *lungak*（ルンガッ）と呼ぶ常用・両刃の刃物を用いて、押して削る（図20）。木は乾燥している方がよい。逆木にしない。

## (2) 境界防御の柵

**名称** *bungai jaraw*

**用途・形状** 部族間で戦いが起こった際、敵の来襲に備えて、村の境界に当たる道路を横切るように高さ6フィート（1.8m）ほどの柵を作る（図21）。この時、柵の縦棒、横棒共に削りかけを施す。これは近づくなという警告（sign of warning）で、これを超えたら戦いの意志があるとみなされて殺される。また、戦いの際には戦士が削り片を頭に飾る（図22）。

## (3) 標識（シルシ）

人数分の樹皮を削り起こして、森の中でのしるしとする。一番下に削り片を結ぶ（図23）。削り片は、ここにシルシがあるという目印となる。

**その他** 森で火おこしをする際、削り片を焚き付けとして用いる。名称不明。材料は手頃な木なら何でもよい。

## ⑧ Lubok Bayang村／イバン／Bayamさん（40代）

※クチンでのガイドさん、出身の村についての伝承を聞かせてくれた

### (1) 装飾

**名称** *bungai jaraw*（ブンガイ・ジャラウ）。ブンガイは「花」、ジャラウは「戦いたいという意志」「何かをslash／cut（切り落とす、切断する）したいという意味」で、ブンガイジャラウは首狩りの習俗と深い関係がある。

**用途** Hornbill Festival（ホーンビル祭り）の際、装飾のために立てる。H.Festは収穫祭の後、もしくは収穫祭と一緒にロングハウス単位で行なう祭りで、夢などでお告げを受けて執り行なう。ホーンビルとはサイチョウのことで、村の中央に高い柱を立て、その先に木彫りのサイチョウを取り付ける。この周囲で3日間、歌を歌い続け、最終日にはポールによじ登ってこれを倒し、それによってサイチョウが飛び立ったとする。首狩り兵士のためのもので、祭りをしないとその兵士のspirit（精霊・精神）が悪くなるという。Bayamさんの村でこの祭りを最後に行なったのは1985年、首狩りは1940年頃まで行なっていたらしいという。この祭りの際、できるだけ多くのブンガイジャラウ（腕くらの太さだという）を作り、飾り立てる。

本来ブンガイジャラウはH.Fest以外に飾ってはならなかったが、現在は様々な儀式的装飾に使うようになった。兵士のための祭りにのみ、ブンガイジャラウを用いるのは、これが戦争を起こすときのメッセージで（(3)を参照）戦いに深く関係するものだから。

**形状** 個人のcreativity（創造性）により、形は異なる。

**材料** 材料は通常 *takalong tree*（タカロンの木）。木肌の白い木でとても成長が早い。また、この木の樹皮を叩き伸ばして樹皮布を作る。万一この木が無ければ *pelai tree*（ペライの木）でもよい。

**製作方法** ホーンビル祭りが始まる3日前から祭りの準備を始めるが、その期間にブンガイジャラウも作る。製作する際には、まず god（神）に small offering（ちょっとした供物）を捧げてから取り掛かる。これは悪い spirit から身を守るため。製作は昼間に行なう。

**製作者・禁忌等** 製作するのは男性で、年配者（40歳位以上）のみ。これらの人は強い spirit を持っており、悪い spirit から身を守ることができるから。美しいブンガイジャラウを作ることは刃物を扱う技術が優れている証明であり、そうした技術を持つことは「現代におけるクレジット・カードを持つことと同じようなもの」だという。また結婚前の女性、子ども（男女とも）は spirit が若く、安定しないので触ることができない（もし触ってブンガイジャラウが倒れたりすると凶兆となってしまうため。凶兆とは、例えば触った人が死んだり気が狂ったりすること）。結婚後の女性なら触ってもよい。

**伝承の経緯** 15歳の頃から作り方を習った。Bayam さんが20歳頃、村には作れる人がたくさんいた。

## (2) 削りかけの柵

**名称** *bungai jaraw*

**用途** 敵の来襲に備えて村の境界に削りかけで柵を作る。Magical（呪術的な）意味を持つ。

## (3) メッセンジャー

**名称** *bungai jaraw*

**用途・形状** 戦いを挑む相手の村に使者が夜間忍び込み、高さ6～7フィート（1.8～2.1m）ほど、腕の太さ位のブンガイジャラウ1本を地面に立ててくる（可能なら、ロングハウスの中央部分の前の地面に突き立てる）。これはいわば「果たし状」で、ブンガイジャラウには来襲するまでの日数分だけ、シルシをつける（図24）。受け取った村では来襲に向けて準備を整える（例えば女性や子どもを屋根裏の倉庫に隠したり、数人の兵士をつき添わせて、小屋を作って隠れたりする）。この棒に削りをつけるのは、それが果たし状だと簡単に見分けられるようにするため。この習俗については両親や村の年配者から習ったという。

**その他** 森で火おこしをする際、削り片を焚き付けとして用いる。名称不明。材料は手頃な木なら何でもよい。

## ⑨Betong 村とSaratok村（サリバス地域）／イバン／Jantan Umatさん（66歳）

※クチンにある Tun Jugah 財団の職員で、出身の村のあるサリバス地域の伝承を聞かせてくれた。

サラワクにはイバンの大きな居住区がサリバスを含めて3つあるが、サリバスにはイバン人口の4分の1が住んでいるという。

### (1) メッセンジャー

**名称** *bungai jaraw*。ブンガイは「花」、ジャラウは「cut from other places（切り取る）」の意味。

**用途・形状** ブンガイジャラウは本来、常に「戦い」を意味していた。自分の村が危険に晒された時、ブンガイジャラウを自分の味方の村々（親戚の村やalliance（同盟）のある村）全てに、「オ



図18 カバロツを作る。ウベツという小刀（右）で押し削る。先を3～4股に削って華やかに見せるなど、工夫をこらしている



図19 山中の標識。人数と向かった方角を示す

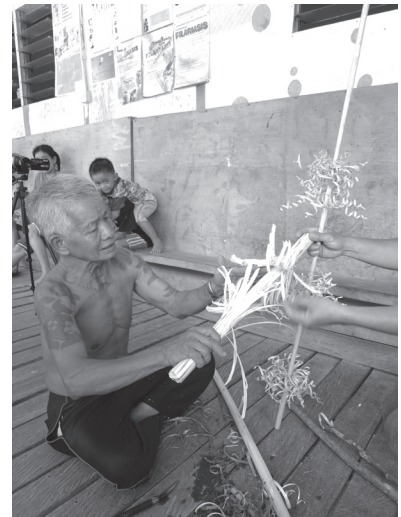


図20 （左）ブンガイジャラウを作る村長さん／図21（右）敵の来襲を防ぐ柵について説明してくれている。柵の横棒には、向かい合うように削りをつけたブンガイジャラウを用いるという



図22 村長さんがおもむろに削り片を耳に挟んだ。兵士の飾りだという



図23 山中の標識。左手のすぐ上辺りに注意喚起の削り片が結んである

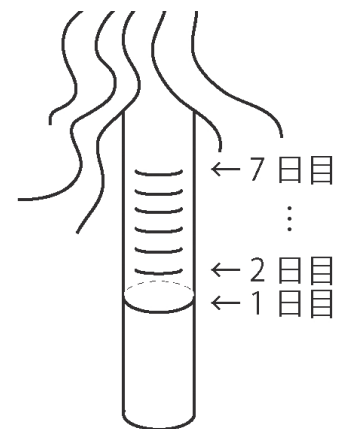


図24 果たし状、メッセンジャーとしてのブンガイジャラウに刻まれた日数を示すシルシ。最初の1日分は一番下にグルリと刻みをつけ、2日目以降はその上に横一文字の刻みをつける



リンピックのトーチのように」リレー形式でまわし、援助を求める。持ち歩くので長さはせいぜい2フィート（60センチ）くらい。削りはbushyな（ふさふさしている）方がよいが、持ち運びに邪魔なので適度に削りをつける。ブンガイジャラウには削りを施すほか、次の3つものを括り付ける。

a) *bulu manuk*（ブルー・マヌーク）：雄鶏、特に闘鶏に用いる鶏の羽根。鶏の羽根はイバンにとっては大切な意味を持つもので、神へのメッセンジャーを意味する。羽根を付けることで、これが緊急メッセージだということを表わす。

b) *papung lutik* / *papung unggat*（パプン・ルティーク／ウガット）：消し炭。昼夜を問わず運び続けなければならない緊急メッセージだということを表わす象徴として、火の燃え残りを付ける。

c) *temuku*（テムク）：長く裂いた樹皮で、Xデー（来襲の日）までの日の数だけ結び目を作ったもの。1日ごとに結び目をほどいていくことでカレンダー代わりにする。

**材料** ブンガイジャラウには柔らかい木を使う。

**製作方法・道具** *Lungga peraut*（レンガッ・プラウト）という刃物を使って押して削る。これはレーザーのように鋭利な小刀で、ラタン細工をする時などにも使う。

## (2) 焚き付け

**名称** *bungai jaraw*

**用途** 戦いにおいて敵の村を焼き払う際、ブンガイジャラウを焚き付けとする。あるいは敵に襲われるとわかった際、自分の村の食糧や物資を略奪されないために自分の村を焼き払うのにも焚き付けとして用いる。通常、森で火をおこすためにも削り片を使うが、これはブンガイジャラウとは呼ばず、区別する。ブンガイジャラウを用いるのは、必ず戦いの時のみ。

## (3) 装飾

**名称** *bungai jaraw*

**用途・形状** あらゆる装飾に用いるようになったのは modern context（近代的な意味の変容）だ。VIPを歓迎するため、船着き場から上がってくる道沿いの手すり等に、ブンガイジャラウと、*isang*（イサン）と呼ばれる特別なパームリーフを装飾として飾りつける。この2つの飾りを合わせて *Tali marau*（タリ・マラウ）と呼ぶ。*Tali* は string（紐や細いロープの意味）、*Marau* はブンガイジャラウとイサンを合わせたものと呼ぶ。

また最近ではレガッタ（ボートレース）の際、船首に飾りとして立てる。これはファイティング・スピリットを表わすものであろう。近年は着色する場合もあるが、本来は木肌の色で、白色。

## 3. まとめ

ここまでボルネオの削りかけ状木製具をめぐる習俗について報告してきた。今回の調査のように、調査者がほとんど前知識を持たないで臨んだ場合、聞き取りは当然のように断片的にならざるを得ない——例えば⑦のイバンの村でメッセンジャーの習俗について聞けなかったのは、それが存在しないのではなく単に聞き漏らしただけという可能性が高い。しかしそうした断片的調査であったにも関わらず、ボルネオに削りかけ状木製具を用いる多様な習俗が伝承されていたことは十分に窺うことができる。そこで本節ではボルネオにおける習俗の概要を簡単にまとめた上で、特徴的と思われる要素を

取りあげておきたい。

### (1) 習俗の概要

まずその用途において共通しているのは、これが装飾としてごく一般的に用いられてきたことである。例えば、サラワク州下の民族文化を民家展示によって紹介するサラワク文化村には、これでもかというほど削りかけが飾ってあるし（図25）、Tun Jugah 財団の Jantan氏（⑨）によれば、マレーシア国内で削りかけ研究の蓄積がないのは、それが装飾としてあまりにも当たり前すぎたためだろう、というほどだ。

しかし一方で、本来は単なる装飾ではなく、特定の儀式（特に首狩りや戦いに関係する習俗）にしか使ってはいけないという認識も聞かれることから、今後、より詳細な調査が必要になってくるだろう。またこうした儀礼的用途に加え、焚き付けや標識としてなど、削りかけ状木製具が実用的用途に使われる点も看過できない。これについては後述したい。

また習俗の広がりについては、これが特定の民族に伝承されているのか、むしろ特定の地域に見られるのか、現段階では判然としない。ただ、今回削りかけ状木製具に関わる習俗を確認できたのは、お話を聞くことができたブラワン、プナン、カヤン、キプット、イバンに加え、習俗の存在のみを確認できたビダユ、ペナン、クニャーなど多岐にわたっているから、この一帯のいわゆる先住民族の間では、広く共有された習俗であったことは確かであろう。なお、サラワク文化村の各民族出身者によれば、削りかけ状の木製具は「元々オラン・ウルのもの」という共通認識があることも付記しておく。冒頭で触れたように、オラン・ウルとは川の上流（すなわち奥地）に住む20以上の民族の総称であり、その真偽はわからないが、イバンのブンガイジャラウなども元々はオラン・ウルを倣った習俗だという話であった。

また、削りかけ状木製具をモノとして見た場合、例えば形状に対する特段の規定やタブー等がなく個人の自由とするところ、また一方で削りかけに用いる樹種が定まっていることなど、本州以南での習俗の在り方と共通する部分は多い。またその製作技術は、確認できた全ての地域で、細工物等に用いる常用の小刀を押して削る方法が共有されていた。日本列島の場合、北海道アイヌをはじめ中部～関東山間部一帯ではカギ型の刃物を手前に引いて削る技術が、南九州や紀伊山地、東北などその他多



図25 サラワク文化村（クチン）の民家展示と削りかけ状木製具。イバンの民家（左）とオラン・ウルの民家（中）では、家中に削りかけが飾ってある。右はオラン・ウルの削りかけ

くの地域では常用の刃物を押して削る方法が一般的である。本稿では詳しく触れないが、こうしたモノとしての側面の比較・検証も、今後の課題のひとつであろう。

## (2) 首狩り習俗のなかの削りかけ状木製具

ところで当然のことながら、削りかけ状木製具はそれ単体として文化の中に存在しているのではなく、その文化における他の様々な要素と密接に関わり合いながら、分かちがたく存在している。言葉を換えれば、木を削るという行為や技術、そこに特別の意味を見出すという志向・思想は共有していても、それぞれの文化の中でそれがどのように位置づけられ、表現されるかは異なってくる——例えば日本の本州以南において、削りかけというかたち、存在が、しばしば「予祝」という観念に伴って表出されるように、あるいはアイヌのイナウが神への使者という形で表現されるように。その意味で言えば、ボルネオに特徴的な表出の形として挙げられるのが、削りかけ×首狩りや戦いの文化という取り合わせであろう。

その結びつきはイバンでは特に顕著で、削りかけが戦いにおけるメッセンジャーや防御柵、兵士の装飾、あるいは兵士のための祭礼等に用いられたといい、特に⑧⑨では、本来ブンガイジャラウは戦いに関係する用途にしか用いなかったと明言している<sup>8)</sup>。また断片的ではあるが⑥のキプットでも首狩りで狩った頭をカバロッ（削りかけ）で包んだというし、詳細は不明なものの⑤カヤンの方の話の中には、首狩りから帰還した兵士のために立てる削りかけの儀礼棒（*pungfut nyeng*）が出てくる。あるいはP.Matusky（1986）は、サワラク Rejang 川上流域の諸民族（セカパン、ラハナン、カジャマンを含むカジャン民族）が用いる *kesut* と呼ばれる削りかけ状の楽器（*stamping bamboo pole*）を紹介しているが、これもやはり戦いから帰還した兵士を迎えるための伝統的儀礼（*ngayau ceremony*）において用いられたものだと言っている<sup>9)</sup>。

「戦い」と削りかけ状木製具のこうした結びつきは、削りかけがそもそも男性によって作られることとも関係していると考えられる。つまりボルネオの諸民族にとって刃物の扱いは男の領域に属する技能であり、削りかけを作れることが一人前の男としての証となるし、それをより美しく作ることは、より刃物の扱いに精通していること、すなわち森で生きていくための高い技術や知恵を備えていることの証明となる。その意味で、削りかけ状木製具は男性性を象徴するものだとも考えられ、ひいてはそれが雄々しい戦いの象徴たりえたとしても不思議ではない。そのことは、アイヌ文化においてイナウが男系出自を表象したり<sup>10)</sup>、イナウを美しく削ることが一人前の男たる証ともなったりとされることにも共通するといっていよう<sup>11)</sup>。

また首狩りや戦いといった、ボルネオの諸民族にとってきわめて大切な文化要素に削りかけ状の木製具が登場することは、削りかけもまた、彼らのアイデンティティを形作りうる重要な要素であったことを示唆するものと言える。ボルネオにおける削りかけ状木製具の起源や来歴を時間軸上で問うことはほとんど不可能な課題とも言えるが、それが文化の様々な局面に形を変えながら表出していること、またその文化アイデンティティの核となるような習俗と結びついているという事実は、少なくともそれが近年の新しい移入などではなく、時空間上に一定の深度と広がりを持つ習俗であることを示すものと言えるだろう。



## ボルネオと日本列島における削りかけ状木製具の習俗

さて、次に両者を比較した場合に、何が比較の糸口となりうるのか、あるいはボルネオから日本列島の削りかけ習俗を照射することで何が見えてくるのか、断片的資料を寄せ集めながら、思いつくままに挙げておきたい。

### 1. 花と削りかけ

まず触れておきたいのは、削りかけ状木製具の習俗における「花」の観念である。

イバンでの削りかけの呼称、ブンガイ・ジャラウの「ブンガイ」とは花の意味だという。ジャラウは cut、slash のような意味だというから、差し詰め「切り花」というところだろうか。またイバンに限らず、英語で直接やり取りした①ベラワンや⑤カヤン、⑥キプットの方も、削り片の部分を指して「this flower (この花)」と呼んでいたのは大変興味深い。なぜなら、削りかけを「花」と形容する意識は、単にその形状に由来するのではなく、より深い文化的背景に根差す可能性があると考えられるからである。

例えば、日本の本州以南、いわゆる和人文化における削りかけと「花」との関わりは深い。というのも、削りかけは多くの場合「花」と認識され、その名称にもハナ、ケズリバナ、チヂレバナ、ノシバナなどハナ系の言葉を持つものが圧倒的に多いからである<sup>12)</sup>。この場合の「花」が意味するものは、先触れとしてのハナ（花・端・鼻）、すなわち作物の豊穰な実りを予兆するものとしての意義であったと考えざるを得ない<sup>13)</sup>。それは宮本常一が「日本の文化」を評して「その根底において植物的であり、しかも農民的であり、あらゆるものに飼育と再生の思想がひそんでいる<sup>14)</sup>」と述べたように、日本（和人）文化における「予祝」という観念の重要性を示唆するものであろう<sup>15)</sup>。

一方で、アイヌ民族においてはイナウを「花」と捉える意識は全く見られない。それはそもそも、アイヌ文化において「花」が重要な文化的意義を持っていなかったからと考えられ、例えば更科源蔵はアイヌ語に花の固有名称が極端に少ないことを指摘し「アイヌの人たちは、花に対してほとんど関心を示さなかった<sup>16)</sup>」と記している。農耕を重要な生活基盤のひとつとする本州以南の和人にとって、花が豊作の予兆として重要な意味を持ったのに対し、狩猟採集や交易を主要な生活基盤としていたアイヌ民族にとっては、花（いわゆる花卉のついた特定の部位）への関心が薄かったと言えるだろうか。その世界観はアイヌ文化の様々な局面に滲み出ているが<sup>17)</sup>、そのひとつがイナウにおける花観念の不在といってよいだろう。

以上のことを鑑みれば、サラワクの諸民族がこれを「花」と認識していることは興味深いことである。例えば、イバンには入れ墨の風習があるが、その代表的な文様は「ブンガイ」すなわち花の文様だという（図20～22のイバンの村長さんの身体に施してあるのもそれである）。内堀基光によればイバンの入れ墨は「おおかたは定形化した単純なもの」であるが、他の民族と比べてもイバンのそれは「男性性への強い傾斜がみられる」と言う<sup>18)</sup>。それはイバンにおけるブンガイジャラウが、男性兵士の戦いやファイティング・スピリットの象徴だと捉えられていることにも通じるものがあるだろうか。いずれにしろ、今後、彼らにとっての「花」が何を意味するのかという視点も持ちながら、削りかけ

状木製具の習俗について検討していく必要があるだろう。

## 2. 焼畑に関わる削りかけ

もうひとつ取りあげておきたいのが、カヤンの焼畑の際に立てるという削りかけ（パングフット）である（③④）。この削りかけ状の木製具は、今回の調査の中でも唯一、事前にあるいはその場で製作をお願いすることなく、たまたま通りすがりに見つけたものであったから、筆者らにとっても特に印象が深かった。

お話を聞いた2組のカヤンの方によれば、パングフットは焼畑とは何の関係もなく、ただ刈り払い作業の合間に、楽しみのために（for fun）に作るのだという。しかし Jau Auyi さん④によれば、パングフット製作に用いる樹木はだいたい決まっており、それは焼畑作業の中で刈り払われたものの中から選ぶという。このことは、パングフットを作ること自体が、焼畑作業の中の一連の行為として組み込まれていることを示すと言ってよい<sup>19)</sup>。また、パングフットを川辺、すなわち交通路である川から目につきやすい場所にわざわざ立てるということも興味深い（お陰で筆者らも見つけることができた）。つまりパングフットは、現在どこで焼畑が行なわれているのかを示す合図、言葉を換えれば、その土地を誰かが占有していることを示す標識の役目を果たしていたとも考えうる<sup>20)</sup>。

あるいは別の角度から焼畑と削りかけの関係を考えることもできる。P. Matusky は同じくオラン・ウルであるクニャーの楽器、*kidiu* を紹介しているが<sup>21)</sup>、これはいわゆる唸り木と呼ばれるものの系統で、紐の先に結びつけた板片を回して風切り音を出す仕組みになっている。この紐が結わえつけてある持ち手の棒が削りかけ状になっているのだが、この簡素な楽器は、焼畑耕作による陸稲の収穫祭において用いられるのだという。さらに興味深いのは、*kidiu* の唸り音が、収穫された稲を狙う害獣を追い払うのにもきわめて効果的だと報告されていることで、この削りかけを施した道具が、実用的な意味においても焼畑耕作と関わりが深いことがわかる。つまりここでは、害獣を追い払うための削りかけ状の木製具が、豊作・豊穡の象徴へと転化された可能性も否定できない。現段階では断片的資料からの推測にすぎないが、少なくとも、焼畑作業の合間にパングフットを作ることがただの暇つぶしや楽しみのためではなく、また唐突な思いつきでもなく、焼畑に関係した何等かの意味ある行為であったと想定することは可能だろう。

ところでかつて大塚和義は、日本列島本州以南の削りかけ習俗の分布について、それが焼畑農耕の分布と重なる可能性を指摘した<sup>22)</sup>。実際には、図1の分布図で示したように、分布は内陸山間部や丘陵部のみならず平野部や沿岸地域にも及んでおり、必ずしも焼畑農耕と不可分に結びつくわけではない。しかし少なくとも、本州以南の削りかけが大正月ではなく畑作関連の儀礼の多い小正月の周辺に色濃く伝承されていること、しばしば「アワボ・ヒエボ（粟穂・稗穂）」「アワボ」などと呼ばれることなどは、削りかけと畑作という生業文化との結びつきを示していると言ってよい。少なくとも、水田稲作に関わる儀礼に表出する削りかけはごく限定的で、「粟穂」に対するところの「稲穂」名称もごく例外的な事例に留まっている。こうした生業との関わりは、今後の比較の際のひとつの指標となりうるものであろう。

### 3. 削りかけの聖と俗

最後に触れておきたいのは、ボルネオにおける削りかけ状木製具（あるいはその技術）が、実用的用途と儀礼的用途の双方に供されるという点である。実用的用途の際たるものは焚き付けであり、森の中で火をおこす際、木材を削りかけ状にすれば火が付きやすいという理由で用いられる。これはボルネオのみならず、日本列島を含めた広い地域で確認される実用的な木材利用の知恵でもある<sup>23)</sup>。

ただしボルネオにおいては、その実用性は常に「俗」の位相に留まっているわけではないようだ。例えば⑨において、ブンガイジャラウが村の焼き打ちの際の焚き付けとしてのみ用いられたことなどはその一例である。Jantan 氏によれば、ブンガイジャラウは日常生活における焚き付けとは厳密に区別されているといい、同じ焚き付けの機能を持ちながらも、削りかけが俗から聖の領域へと移されていることがわかる。また詳細は不明なもの⑤の場合でも削りかけ（パングフット）の削りの部分は燃やしてはいけないと伝承されており、イバンと同様、それが聖なる火を意味してしまうからという可能性を否定できない。

実はこうした聖と俗の領域間の揺らぎは、ボルネオに限らず、削りかけ状木製具の周辺ではしばしば見られるものである。例えば焚き付けで言えば、日本列島においても、奈良・東大寺のお水とり（修二会）や和歌山・新宮の神倉神社のお燈祭り、熊野那智大社の扇祭り、祇園の削りかけ神事などの祭礼行事において、あるいは漁業習俗として航海の神に祈る習俗<sup>24)</sup>等において、「神の火と削りかけ」という取り合わせがひとつのまとまった伝承群を為している。つまり火と削りかけの関わりにおいては、ボルネオでも日本列島でも、焚き付けとしての実用的な側面と、神の火を点ずるための神聖な側面とのふたつが混在していたことがわかる。

また焚き付けに限らず、先述したクニャーの楽器 *kidiu* は害獣駆除という実用的用途と収穫祭に用いられる楽器としての儀礼的用途があるという。あるいは、森の中で人の移動などのメッセージを伝える削りかけの標識が実用的用途に傾いている一方、同じくメッセンジャーであるイバンのブンガイジャラウは、より儀式的、呪術的なおもむきを色濃く持っている。日本列島でも、アイヌ民族におけるイナウは様々な作法や禁忌と共に、特に厳格に祭具として扱われるが、それでもなお、知里真志保や久保寺逸彦が指摘するように<sup>25)</sup>、キケ（削り片）が脱脂綿や物を結んだり包んだりするのに用いられることもあり、聖性と実用性の両方の機能を期待されていると考えることができる。また『蝦夷島奇観』（1799年）の図絵にも見えるとおり、仕掛け弓<sup>アマツボ</sup>の位置を知らせ、注意を喚起するためにイナウを木に括り付けておくなどの用途も報告されており<sup>26)</sup>、サラワクの山中の標識と同様、シルシ、サインとしての実用的な機能もあったことがわかる。

このように、ボルネオから日本列島の削りかけ習俗を照射することで、あらためて削りかけ状木製具に含まれた聖と俗が浮かびあがるように思われる。日本列島における削りかけはこれまで、神の依り代として、あるいはイナウという聖なる道具として、あたかも生まれながらに聖性を帯びているかのように語られるのが常であった。しかし、生業に基づく実際の技術、あるいはひとつの型としての造形が、ある部分で削りかけに転用された可能性は、当然想定すべきであろう<sup>27)</sup>。少なくとも、削りかけの技術が他の様々な生業技術から独立してあるのではなく、日々の営みのなかにおいて培われてきた実用的かつ生活に不可欠な技術によって支えられていたことは確かである。それはまた、聖性



がいかにして発生するのかを考える上でも、ひとつの重要なヒントとなるのではないだろうか。

以上、ボルネオ島サラワク州の削りかけ状木製具についての調査報告と、若干の考察を行ってきた。冒頭でも述べたように今回の調査はプレ調査であり、得られた資料も断片的である。それに加えて、マレーシア国内でも関連する研究蓄積がないのが実情のようであり、日本列島に類似の木製具があることも知られていない。

今後の課題は多いが、これをひとつの端緒に、これまで日本民俗学の中に閉じられてきた削りかけ習俗に関する調査・議論を東アジアにまで広げ、そこから日本文化を逆照射していきたいと考えている。本稿が、そのささやかな第一歩になればと思う。

### 《注》

- 1) イブリン・ホン1989『サラワクの先住民 消えゆく森に生きる』北井一・原後雄太訳 法政大学出版局
- 2) Mike Reed 1998, *A SHORT WALK THROUGH SARAWAK*, The Sarawak Press Sdn Bhd, Kuching
- 3) お話を聞かせてくれた方の年齢はすべて2012年6月現在のものだが、ご自身の正確な年齢がわからない方も多数おり、その場合は「推定」とした。
- 4) 「VIP」は現地表現のままで、特に政府の要人をはじめとする大切な客人を指す（以下同）。
- 5) ポール等に飾りつける際、邪魔にならないようにするためと説明される。
- 6) 刈り払いは6～7月。1ヶ月程乾燥させた後、8月頃に火入れし、8月末から播種を始めるという。
- 7) カヤン語辞典には *penghut*（もしくは *menghut*）として「火の焚き付けに用いる」と説明されているから同一の呼び名であったか。（C. Hudson Southwell, 1980, *KAYAN-ENGLISH DICTIONARY*, Jiwamasu Printers, Malaysia）
- 8) 例えば Jantan 氏（⑨）によれば、戦い以外の目的で日数を伝達する必要がある場合は樹皮で作ったロープに結び目をつけたもの（*temuku*）のみを用い、決してブンガイジャラウは用いないという。
- 9) 削りかけを施した1.5～2 呎の竹の棒を女性たちの集団が持ち、前身しながら床を突いて音を立てるというもの。なお、セカパン、カジャマン、ラハマンいずれの民族においても *ngayau* 儀礼において用いられたことが報告されている。Patricia Matusky 1986, 'Aspect of Musical Style Among the Kajang, Kayan and Kenyah-Badang of the Upper Rejang River: A Preliminary Survey,' *THE SARAWAK MUSEUM JOURNAL* vol.57, The Museum, Kuching, Sarawak, Malaysia
- 10) 大林太良は、イナウの機能が本来的には「神と人との間の仲介者として」のものであったと指摘した上で、河野広道が同じ血族のアイヌが同じ形式のイナウを用いるとした報告を受け、イナウ自体がイトクパ（イナウに刻まれる祖印）と同様にひとつの占有標識となるものであり「深い宗教的意義をもった、男系出自集団の標識」の役割を果たしていることを示唆している（大林太良 1993「イナウの起源」『北方の民族と文化』山川出版社）。

- 11) 萱野茂によれば、イナウを作ることは男の大事な仕事であり、これに長けた人は獲物を仕留める矢を作るのが巧い「イソンクル（狩の名人）」として尊敬されたという。アイヌの子どもたちは一人前に刃物を使えるほどの年になるとイナウ作りをはじめ、これによって木彫り技術の基礎を学ぶという（萱野茂 1998『アイヌの民具』すずさわ書店）。
- 12) 小正月に用いられる削りかけにはハナ系名称のほか、アワボ・ヒエボ系名称（アーボヘーボ、アボヘボ、アワボ、イナホ、ムギノホなど）、ケズリカケ系名称、ホダレ系名称（ホーダレ、ホダラ）などが認められるが、このうちハナ名称は半数以上を占めている。例えば群馬県下の削りかけについて悉皆調査を行なった『上州の小正月ツクリモノ』（群馬県立歴史博物館 1995）では、「削り掛け類」として309事例が挙げられているが、このうちハナという言葉（あるいはキクなどの花の名）を含む名称は、全体の94%以上にあたる291例にも及んでいる。また小正月以外の時期に用いられる削りかけにしても、東北地方でお彼岸に飾るものもケズリバナ・ハナと呼ばれ、生花のない時期の「花」だと明確に認識されている。紀伊半島山間部で霜月の山の神祭りに用いられる削りかけも、その形状が花を模しているようには見えないにも関わらず、多くの地域でケズリバナと呼ばれている。（以上筆者調査、分布については図1も参照）
- 13) それは小正月の削りかけにおいて、ハナ系以外の名称も、粟穂や稗穂、穂垂れなど植物の実りに関する意味が含まれる場合が多いことから推測される。
- 14) 宮本常一 1974「日本の習俗」『風土と文化』未来社
- 15) 実際、小正月の周辺では呪術的な祝い棒で新嫁の尻を叩き懐妊を願う儀礼や、果樹を叩いて豊作を約束させる行事等が広く行なわれており、これらは一般に予祝系行事と分類される。この祝い棒もしばしば削りかけの形状を採っている。
- 16) 更科源蔵 1985『コタン生物記』Ⅰ 樹木・雑草篇 法政大学出版局
- 17) 例えばアイヌが儀礼に用いるイクパスイと呼ばれる祭具の文様について言及したF.マライニは、「花の文様」を持つイクパスイは数のごく限られていることを指摘し、次のように述べている。「花の文様だと解釈できる装飾は多いが、実際の描写は数の少ない *iku-bashui* に限られる。花と葉を描写する珍しい例もあるが、明白に植物形の実際の文様は日本に由来したものに限定されていて…（中略）…反対向きの二つの葉の文様も日本に由来したもので、その模範は刀の鐔の装飾として現れる（文中、図番号は省略）」（フォスコ・マライニ 1994『アイヌのイクパスイ』アイヌ民族博物館）
- 18) 内堀はイバンの入れ墨の特徴として「男たちが喉、肩、背中というように、上半身に広く、しかも大きな文様のものをほどこすのにたいし、女たちは下腕部のみに比較的目立たないかたちでプレスレット上に入れるだけというように、男性性への強い傾斜がみられる」としている（1996『森の食べ方』東京大学出版会）。
- 19) このことはさらに、パングフットの材となる樹木が二次林に生える植生を利用したものであることをも示している。実は日本列島における削りかけの材も二次林の植生を利用したものがほとんどである。このことは、削りかけの樹種を選ぶということの前提に、人為活動による自然への介入と、それに呼応する形での生態系の変化があったことを表わしている。すなわち、生業をも含めた暮らしのサイクルの中に、削りかけを作るという行為が組み込まれていたことを示すものと言え

る。詳しくは今石 2010「削りかけ状祭具にみる人と樹木との関わり——人々の認識と生態学的視点から」『民具研究』141 日本民具学会

- 20) こうした占有標は日本列島の民俗文化においても、特に所有者が定まっていない土地や毛上物（焚き木、カヤなど）に対する占有を示す方法として、様々な形で行なわれてきた。これについて秋道智彌は、その発生が「中世はもとより古代にまでさかのぼれる」こと、また「多様な結界標示の民俗が全国的にみられ」、それは「注連縄のように手のこんだものから、草を丸めたり木の枝を立てたり、自然石をおくだけの素朴なものまでがあった」ことなどを指摘している（秋道1995『なわばりの文化史』小学館）。その具体例は枚挙に暇がないが、例えば鹿児島県下甕島では昭和30年代まで、1月2日の初山に、木に刻みを入れて簡単な削りかけのようにした「クイ」を、自分がキリバタ（焼畑）の耕作地として確保しようとしている土地の四隅に標識として立てたものだという（橋口義民さん、大正15年生まれ談）。
- 21) Patricia Matusky 1990, 'Music Styles Among the Kayan, Kenyah-Badang and Malay peoples of the Upper Rejang River [Sarawak]: A Preliminary Survey,' *THE SARAWAK MUSEUM JOURNAL* vol.62, The Museum, Kuching, Sarawak, Malaysia
- 22) 大塚和義 2002「インタビューアイヌ文化の原像」『東北学』7 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 23) 筆者の調査から例を挙げれば、山口県周防大島町沖家室ではクヌギやマツを削って削りかけ状にし、ケズリバナと呼んで沖で船のカマドにくべたといい、明治生まれくらいまでの人はこれを用いていたという（木村新之助さん、大正9年生まれ談）。
- 24) 岩手から宮城の沿岸部にかけて、漁船や廻船が沖に停泊して夜を迎える際、削りかけに火を灯して海中に投じる習俗があった。詳しくは大島正隆（1987「海上の神火」『東北中世史の旅立ち』そしえて）や亀山慶一（1966「宮城県牡鹿郡女川町江島」『離島生活の研究』国書刊行会）の報告を参照。
- 25) アイヌ文化におけるイナウキケ（削り片）の重要性について認識していた久保寺逸彦は「沙流アイヌのイナウに就いて」という論文において「削掛け inau-kike の用途」として1章を割き、「従来、削掛けがどんな場合使われるか、ほとんど注意されていない」としたうえで、管見に触れたものと断ってから17の実用的用法を挙げている（久保寺 2001（1971）『アイヌ民族の宗教と儀礼』草風館）。あるいは知里真志保は、現在のようなイナウの前身を「棒に石包丁の刃を直角に當てて引き搔き、数箇所搔き綿の小塊をつけたもの」ではなかったかとしたうえで、その「搔き綿」について「北海道でわ ni-maw またわ單に maw、樺太でわ ro-chi と云って、われわれに於けるタオルやガゼや脱脂綿の如く、湿布ざれに用いたり出血の場所に當てて繃帯したりするのに用いる」としている（知里 1976『知里真志保著作集』別巻I 平凡社）。
- 26) 内田祐一 2004「描かれたアイヌ民族の暮らし」『先住民アイヌ民族』別冊太陽 平凡社。また静内町（1996『静内町史』上巻）によれば「…アマッポの近くの木には、人間の目の高さのあたりに、下から削りあげた印をつけて注意を与えていた」という。
- 27) 例えば熊本県天草郡宮田村（現天草市倉岳町宮田）には、小正月の削りかけの起源譚として次の



ような伝承も残されている（丸山学 1965『熊本県民俗事典』日本談義社）。

「ある姑が嫁をこまらせるために生木のタキツケをあてがったので嫁がそのまゝでは火がつかないので困ったあげくこの削り掛けを工夫した。それでこの新嫁の苦労を記念して毎年これを作って祝うことになった」

## Preliminary research on *Kezurikake*-like poles in Sarawak State, Borneo

IMAISHI Migiwa

This report examined customs and folk techniques related to poles found in Sarawak State of Borneo, Malaysia from June 28<sup>th</sup> to July 4<sup>th</sup>. These poles resemble the *Kezurikake*, or half-shaved sticks, found in Japan. In the Japanese Archipelago, *Kezurikake* are widely used as ritual implement or as decorations during *Ko-syogatu*, or the New Year according to the lunar calendar, or as *Inau*, a ritual implement of the greatest importance to the Ainu people. Although similar poles were known to be found in Borneo, there have been almost no field studies or comparative studies of these poles by experts. Thus, preliminary research was conducted in cooperation with experts from the Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University in order to facilitate future comparative studies.

The research site provided several opportunities to talk with local residents and observe their creation of these poles. A rough outline of customs related to these poles was also obtained. The names, uses, forms, and materials of these poles differ slightly depending on the tribe.

The Iban people, for example, call these poles *Bungai Jaraw* (*Bungai* meaning “flower,” and *Jaraw* meaning “to cut” or “to slash” ). Nowadays, these poles are typically considered a decoration to welcome “VIPs.” However, there are some evidence that these poles had greater symbolic or religious meaning since they played an important role in headhunting and during traditional festivals for the warriors. More in-depth research is needed in order to better understand not only the customs of *Kezurikake*-like poles in Borneo, but also that in Japan.